B19 鉄道車両客室におけるヒョウヒダニ汚染Ⅱ上原弘三[○]・永田健二(シントーファイン)・小西英二(神戸大・医・医療基礎)Infestation of *Dermatophagoides* mites in railway vehicles II

Uehara K., Nagata K.(Shinto Fine Co.,Ltd.),

Konishi E.(Dept Hlth Sci, Kobe Univ Sch Med)

前回の学会で毎日の通勤や旅行で利用する鉄道車両客室内を対象とし、関西鉄道会社6社の通勤列車と寝台列車を調査した結果の一部を報告した。今回、年間を通じて(10、1、4、7月)調査した結果を報告する。細塵の採取は紙パック式ハンディタイプのクリーナーを用いて座席の25cm×25cm 範囲の塵を15秒間かけて採取した。塵中のヒョウヒダニ抗原量は既報に従って測定し、 m^2 当たりのダニ抗原量に換算した。調査した月ごとに鉄道各社の平均抗原量を代表値として各月の平均値(最小値-最大値)(いずれも $\mu\text{g}/\text{m}^2$)を算出した結果、都市型近郊区間列車においては、10月:55.62(25.32-107.62)、1月:95.17(8.25-197.15)、4月:22.62(3.92-52.45)、7月:10.62(0.00-28.79)と10月と1月が多く、特急・寝台列車においては、10月:30.84(26.83-35.49)、1月:5.11(2.29-9.20)、4月:1.81(0.75-3.13)、7月:11.20(2.21-30.10)と10月が多く、7月にやや多い傾向が見られた。また、総合的に見ると都市型近郊区間列車が特急・寝台列車に比べて高い抗原レベルを示した。

B20 ヤエヤマゴケグモ(仮称)の毒腺タンパク質と輸入抗毒血清との反応について小林睦生^{○1)}・佐々木年則¹⁾・吉田政弘²⁾・武藤敦彦³⁾・安居院 宣昭¹⁾¹⁾ 国立感染研・昆虫医科学 ²⁾ 大阪府衛研・医動物 ³⁾ 日環セ・環境生物Reactivity of red back spider antivenom to the venom proteins of *Latrodectus* sp. collected in Yaeyama Islands

Kobayashi M., Sasaki N., Yoshida M., Muto A. & Agui N.

腹部背面の赤色斑紋がセアカゴケグモとは明らかに異なるゴケグモが八重山諸島に分布しており、そのゴケグモ(ヤエヤマゴケグモ)咬症によって重症患者がでた事が1958年に報告されている。しかし、その後八重山諸島での分布調査ではこのクモが発見されず、定着種ではないと考えられていた。しかし、一昨年のゴケグモ類の全国一斉調査において、波照間島でヤエヤマゴケグモの生息が確認された。沖縄公害研でのマウスを用いた毒性試験においても、セアカゴケグモより遥かに強い毒性が確認されている。そこで、現在オーストラリアで製造されているゴケグモ抗毒血清(CSL社)が、ヤエヤマゴケグモの毒腺タンパク質と反応するか否かを明らかにするため分析を試みた。毒腺抽出物中のタンパク質の電気泳動パターンはセアカゴケグモと類似していたが、分子量約15kD付近のバンドが他種と比べ明らかに濃い傾向が認められた。抗毒血清中のIgG抗体がヤエヤマゴケグモ毒腺中の α -latrotoxinに反応することが確認されたが、セアカゴケグモやハイイロゴケグモの反応と比べると若干弱い傾向が認められた。